救世軍公報

GOOD NEWS
ときのこえ

War Cry

3月号
福音版
2020
March
No.2797

二〇二〇年　三月一日　発　行
明治二十八年創刊　福音版・毎月一日発行　広報版・奇数月十五日発行（除く七月）

創立者　ウイリアム・ブース
大将　ブライアン・ペドル（万国本営　英国ロンドン）
日本司令官　ケネス・メイナー（救世軍本営　東京都千代田区）
http://www.salvationarmy.or.jp

一年間プディングを食べない？

山谷　真

「春の募金のお願いにまいりました」と挨拶しつつ、私は毎春ごとに募金先をお訪ねします。しかし、「春の募金」には正式名称があります。「克己週間」です。これは Self Denial Week という英語を明治時代に訳したもので、Self Denial は、本来「受難節の断食」という意味でした。

教会には昔から、イースター（イエスが十字架での死後三日目に復活したことを祝う日）前の四十日間（受難節）に、肉食を断って、祈りに励み、自分を省みる、という慣習がありました。

それは、イエスが自分の罪の身代わりとなって十字架で死んでくださったことを思い、感謝しつつその犠牲を自ら体験するためでした。イエスの十字架の死と復活を信じる人は救いを経験し、喜んでその犠牲を思いめぐらしたのです。

飽食の時代と言われる現代では、カロリーの摂りすぎが問題視されるので、クリスチャンではなくても普段から定期的な断食をする人が増えているようです。

むしろ憂慮すべきなのは、毎日インターネット漬けで、心も思いもソーシャルメディアに支配されていることではないか、と指摘するクリスチャンもいます。

最近では、受難節が近づくと、「みなさん、さようなら。祈りに集中したいので、これから四十日間、ソーシャルメディアのアカウントを削除します。イースターになったらまた会いましょう！」というメッセージを投稿し、インターネットから離れるクリスチャンも、じわじわ増えています。

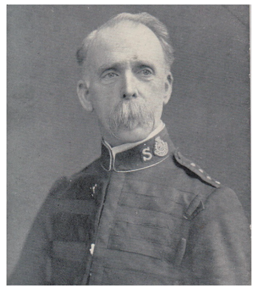
このように、クリスチャンは、受難節、あるいは克己週間を、自分の人生が何に支配されているのかを見極める、良い機会としています。

そのような見極めの中で、私たちは、「ああ、私はいつも、自分が・自分の・自分に……ばかりの世界で生きていたなあ。これじゃいけない」と気づかされているのです。

今から約百三十年前、ジョン・カールトンという救世軍士官（伝道者）がいました。彼は、救世軍が伝道のために使用する物品の製造販売をおこなう部門の責任者でした。

ある時彼は、困難な状況にある海外の救世軍を支援するために、好物のプディングを一年間断ってその分を献金する決心をしました。プディングは、英国人が食後に好んで食べるデザートです。

そのことを知った救世軍の創立者ウイリアム・ブース（大将）は、「プディングを一年間食べないのは、よろしくない。しかし、志はすばらしい。それでは、プディングを一年食べない、などとは言わずに、毎年一週間、みんなが自分の好きな何かを倹約して献金したらどうだろう」とアイデアを示しました。こうして救世軍の「克己週間」が始まりました。



ジョン・カールトン

数年後、ジョン・カールトンは、彼がプディング断ちを誓ったことに共鳴した人々からたくさんの献金が救世軍に寄せられたにもかかわらず、誓いどおり一年間プディングを食べなかった、と告白しています。

あなたも今年、一週間だけ自分の好きな何かを断って、自分を省みる時を過ごされてはいかがでしょうか。きっと、自分の心が何によって支配されているかに気づかされることでしょう。そして、〝何かに支配されている自分〟から抜け出るために、何かをしてみませんか？　周りにいるだれかに何か親切をする、とか、だれか知らない人のために自分の時間やお金を使う、などです。あなたの軌道を修正できる良い機会になるかもしれません。

「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。」（ヨハネの手紙一　3章16節）

（救世軍士官（伝道者））

Photo on Visualhunt

WINDOWS on the ARMY WORLD 世界をみつめて

〈日本〉社会鍋募金と支援活動

各地でおこなわれた社会鍋募金にたくさんのご協力をいただき、ありがとうございました。100年を超える街頭募金として各地で地元新聞やテレビ局の取材を受けました。募金及び支援活動の一部を報告いたします。

○ 2019年12月25日（水）、北九州市にある学校法人折尾愛真学園様から、台風19号の災害被災地のため献金をいただきました。（写真上）

○ 11月11日（月）～ 12月28日（土）、昨年秋におこなわれた臨時社会鍋や各地から寄せられた資金によって、千葉県館山市の台風の被災地において、救世軍、クラッシュジャパン、キリスト教会広島災害対策室共同の「館山屋根修復プロジェクト」がおこなわれました。これは、館山地域の多くの住宅で、業者による屋根修理が遅れている状況に対応したものです。

○ 12月7日（土）、岩手県大船渡市にある非営利型一般社団法人かたつむりの就労継続支援B型作業所を訪問、クリスマス会をおこないました。昼食に大船渡産サンマとトマトを用いた作業所製造の「トマさんソース」の料理を参加者全員でいただいた後、毎年仙台小隊（教会にあたる）メンバーを中心に各地から集まっているボランティアによる楽器伴奏での歌、ゲーム、クリスマスの聖書の話がなされました。作業所では、毎年この会を楽しみにしてくださっていて、最後に心のこもったメッセージカードをくださいました。

〈オーストラリア〉森林火災の現場での支援活動

昨年、9月より、南東部のニュー・サウス・ウェールズ州で始まった森林火災は、年末年始にかけて全国各地で頻発。人々の生活や動植物の生態系に大きな影響を及ぼしています。建物被害は6,500棟以上、死者29人（2020年1月11日現在）となっています。

英国にある救世軍国際本部も支援チームを派遣、被災者及び消火活動従事者への支援をおこなっています。現地の小隊（教会にあたる）や施設を中心に、避難所の開設や給食活動がおこなわれ、火災が広がる中で避難所の移動を余儀なくされるなど危険な状況もありました。ニュージーランドの救世軍からの支援チームも合流しました。ベガでは避難所で3,000人の給食支援をしつつ、地元教会の信徒約100人が共に集って、祈りの時をもちました。

救世軍とは？ What is The Salvation Army?

心は神に　手は人に　Heart to God, Hand to Man

救世軍は、英国ロンドンに国際本部を置く、世界131の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会です。1865年、英国のメソジスト教会の牧師だったウイリアム・ブースによって始められ、家のない人々、仕事に就けない人々、アルコールの悪影響下にある人々、搾取される女性や顧みられない子どもたち、災害に遭った人々などに助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本での働きは、1895（明治28）年に始まり、伝道の拠点である小隊（教会にあたる）を開設。廃娼運動、失業者対策、病院や結核療養所の設立、児童や女性の保護、アルコール依存症者回復支援など、時代にさきがけて、様々な働きを興してきました。日本人で最初に救世軍士官（伝道者）となったのは山室軍平です。キリスト教界及び社会福祉分野における先駆者の一人にも数えられています。

毎年春には、救世軍の国際的な支援活動のために募金運動「克己週間」（3、4月）がおこなわれます。この募金は、救世軍の拠点があるすべての国で取り組まれ、英国の本部を通して必要な活動に資金が投じられます（写真は、ルワンダでエボラウイルス対策のため設置された水施設）。また、協力関係にある国に対する直接支援にも用いられ、今年、日本の救世軍はマラウイの救世軍でおこなわれている反児童人身取引の働き（3、4ページ参照）を支援します。ご協力をお願いいたします。

発行日及び定価
▼発行日
福音版・毎月一日発行
広報版・奇数月十五日発行（除く七月）
▼定価
福音版・一部　四〇円
広報版・一部　一〇〇円
クリスマス特集号（十二月一日号）・一部　一〇〇円
振替・〇〇一八〇ー五ー四四〇〇
発行兼印刷人　救世軍　代表者　ケネス・メイナー
編集人　寺澤　眞由子
〒101ー0051　東京都千代田区神田神保町二ノ十七
電話　東京(03)三二三七ー〇八八一
発行所　救世軍本営
印刷所　ピーアンドエス

（取扱支部）

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

聖書は新共同訳を使用しています　©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会

信仰の体験談
証言のページ

キリストを知る

※ムチンジでの児童人身取引防止及び救援活動について、動画でも紹介しています
↓ QRコード

マラウイ共和国　反児童人身取引施設 職員
ハズウェル・ジムさん

アフリカの南東部に位置するマラウイ共和国。日本の救世軍は、マラウイの救世軍と支援し合うパートナーの関係にあります。今回は、マラウイを訪問し、ザンビアとの国境地域にあるムチンジで児童人身取引の予防と被害者救援に取り組んでいる、反児童人身取引施設の職員、ハズウェルさんにお話をうかがいました。

やんちゃな子どもが、信仰によって人々に仕える仕事へ

六人兄弟の二番目の男児として生まれた私は、マラウイの首都リロングウェで育ちました。子どもの頃はかなりやんちゃで、周りに迷惑をかけましたが、母が女手一つで私を大学まで通わせてくれたことに感謝しています。

私が救世軍に来たきっかけは、母が近所の人に誘われたことでした。一九九一年、私が九歳の頃です。毎週日曜日、リロングウェ小隊（教会にあたる）に母と通い始めました。

その後、十三歳頃から自分の人生と信仰について考えるようになり、小隊のブラスバンドの練習に加わったことが、人生の転機になりました。バンドの練習に自分の時間を割いているうちに、演奏される賛美歌を通して神様からのメッセージを聞くようになりました。それまでの問題ばかり起こす、やんちゃな自分を止めて、神様が望んでおられるような自分になりたい、と心から思ったのです。

小隊ではいろいろな種類の楽器を習得し、音楽を学べば学ぶほど、神様に自分のすべてをお献げし、もっと神様に近づきたいと思うようになりました。

二〇〇〇年、十八歳の時、学校の休み中に他の小隊でおこなわれた「助け合いプロジェクト」にボランティアで参加しました。それは、小隊がある地域の孤児や貧しい家庭の子どもたちに、学校に通うために必要な物や、生活に必要な最低限の衣類や寝具を届けたり、心理的なサポートを提供したり、といった活動でした。

その経験を通して、大学では、様々な困難を経験している子どもたちを支えられるような、彼らが目的をもった人生を送る助けができるような仕事に就ける学びがしたい、と思うようになったのです。そこで、地域開発とプロジェクト管理を専門に選びました。

大学卒業後に就いた仕事が、ちょうど開設準備中だった「救世軍ムチンジ反児童人身取引リハビリテーションセンター」での地域開発責任者でした。本当に神様の導きだと思います。

地域開発責任者として、ムチンジの様々な地域に出て行って、児童人身取引がどのようにおこなわれるか、また、現代の奴隷制の現状について伝え、それらは予防できる、と注意喚起をしています。

施設内では、被害者のための基本的な避難場所の提供、日々のニーズに応えること、レクリエーション活動、カウンセリング、心理的・社会的支援を含むリハビリテーションがあります。あらゆる種類の搾取や人身取引の被害者を救助するために、地域の協力者と共に携わる一つひとつの仕事に充実感を覚えています。

二〇〇七年から現在まで、私は人身取引と現代の奴隷制に反対する人権活動家として、政府からも救世軍からも認められてきました。その十二年の間に、国内だけでなく、ザンビアやモザンビークでの牛の放牧、農場、バー、家事労働などの搾取的な状況から救出された千二百人以上の男女の子どもたち（十八歳以下が児童労働として雇用者の処罰の対象となる）の救助とリハビリテーションをおこない、支援してきました。

私は今、一児の父親です。施設の近所に自分で焼いて作ったレンガで家を建て、生活しています。私のビジョンは、あらゆる角度から子どもたちの生活を守り、そして、あらゆる搾取から保護されるための助けをすることです。私自身が、

「あなたの口を開いて弁護せよ　ものを言えない人を　犠牲になっている人の訴えを。あなたの口を開いて正しく裁け　貧しく乏しい人の訴えを」（箴言31章8、9節）の聖書の言葉を生きる者でありたいと願っています。

「子どもの未来を守りたい」という思いで、地域の人々と協力しています

ムチンジは、ザンビアとの国境に位置するので、人身取引がおこなわれやすい環境です。施設では、被害者が施設を出てからも安全に生きていけるよう、被害者の背景を調査し、安心して再発のない環境に帰れるよう個別に支援しています。

被害者の中には、親族が隣国ザンビアで子どもを働かせることができるという人身取引ブローカーの誘いに乗り、一時金を手にするために子どもを売ったケースがありました。時には、日本円にして約千円で成立していた契約もあります。

人身取引の背景は、国全体の貧困が大きく、その上、農業が主要産業のため、干ばつや洪水などで農作物が被害を受け、急激に経済が困難になる場合もあります。さらに、母子家庭など収入源が乏しい家庭をブローカーが狙い、生じてしまう場合がほとんどです。

ザンビア等の周辺国から人身取引の被害にあった子どもを救出することがありますが、マラウイから流出している子どもの数は、不法入国してくる子どもの数の約七倍に上ります。彼らは、働けなくなると殺されるか、入国管理局に「不法滞在者」として申告され、強制送還されるように仕向けられるのです。

人身取引被害者支援のために、地域の警察、福祉局、労働局、出入国管理局、地方裁判所、そして救世軍の施設スタッフが委員会を組織し、常に協力して、救出と啓蒙活動をおこなっています。警察には人権部門が設置され、ドメスティックバイオレンスや人身取引に特化した活動があります。ムチンジには、児童人身取引被害者のための施設は救世軍しかありません。福祉局は、子どもが最低限の福祉を受けることができるよう、地元の教育部門と協力して保護に当たっています。子どもを救出し、裁判において人身取引の事実が確認されるまでは、加害者から守らなくてはならないため、多くの子どもたちが地域の学校ではなく、救世軍の施設内で学習支援を受けます。労働局は、違法な児童労働を取り締まると同時に、結ばれてしまった雇用契約に介入します。さらに、児童の人身取引が発生しないようにする教育や職業訓練、自分でお金を稼ぐことができる環境づくりに取り組んでいます。救世軍はその役割も果たしています。出入国管理局は、子ども連れの大人で不審な人への尋問や、国境といっても何の目印もない中でのパトロールを通して救出活動に当たっています。地方裁判所で人身取引の刑が確定するための調査等には、救世軍として私も協力します。また、加害者の刑が確定するまでの被害者の安全は、救世軍で確保されます。

警察や福祉局から連絡を受けた救世軍のボランティアが児童の人身取引の現場に駆けつけたり、救世軍の職員と地域の有志によるチームで、人身取引の疑いがある現場に駆けつけたり、といろいろな人と協力して活動をしています。こうした連携が効果的な救出活動に結びついています。

活動に参加している人は、「子どもの未来を守りたい」という思いで取り組んでいます。

THE SALVATION ARMY
THE SALVATION ARMY MCHINJI CHILDREN'S HOME
OVERALL GOAL
Our Goal is to reduce the number of children trafficked in Malawi And the negative impact of trafficking on them, their families and communities.
OBJECTIVE ONE
Sensitizing target communities on issues of child trafficking, Child rights and Malawi legislation.
OBJECTIVE TWO
Strengthening the capacity of TSA systems and partnerships to ensure children rescued From trafficking are safe and cared for while living at The Salvation Army Centre
VICTIM SUPPORT UNIT

写真上より
- ムチンジの施設の施設長（写真上右端）、マラウイの救世軍のプロジェクト責任者（写真上左端）と共に
- ムチンジの警察にある被害者支援のスタッフと共に（左から2人目）
- 施設内の大工養成のための職業訓練室で

ヨタム・フォスター（仮名　写真右）さんは、兄に売られました。彼は、七人兄弟で育ち、父親が亡くなって以来、二人の兄は酒におぼれて生活を支えようとしないので、彼が生活を支えていたそうです。小学校の学費は無償にもかかわらず、学用品が買えず三年で退学しました。十七歳の時、兄が人身取引ブローカーから声を掛けられ、彼を売りました。彼も母も人身取引のことなど知らなかったので、前金の約千五百円をもらったことで信用してしまったのでした。ムチンジに連れて来られ、雇い主の監視の下、牛の放牧をさせられ、お風呂にもほとんど入れず、牛の飲み水のために行った川で体を洗い、食事も一日一回だったそうです。体調を崩しても病院に行けず、体がボロボロになった時、救世軍と労働局、警察の救出チームが、彼が児童人身取引の被害者だと気づき、保護しました。同時に、雇い主は逮捕されました。

救世軍でカウンセリングを受けた彼は、短気だった性格も穏やかになっていきました。学校教育と大工仕事の職業訓練を受け、祖父が身元引受人となり、最低限の大工道具を持って退所しました。施設で初めてイエス様のことを知り、イエス様を信じて教会に通うようになりました。彼は歌が上手なので、賛美歌を歌う楽しさも知ることができた、と喜んでいます。

二十三歳の今、彼は、家庭をもち、子どもも与えられ、大工の仕事で生活を支えています。彼のような存在が私の喜びなのです。

（マラウイ・リロングウェ小隊所属）

キリトリ

□私の近くの救世軍を紹介してください。
□キリスト教についてもっと知りたいです。
□『ときのこえ』の購読を申し込みます。

ご氏名
ご住所

この部分を封書か葉書に貼り、裏面下の救世軍にお送りください。